

---

IS <インフィニット・ストラトス> Deus Ex Machina

ネコのしっぽ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> Deus Ex Mac  
hina

### 【Nコード】

N5613X

### 【作者名】

ネコのしっぽ

### 【あらすじ】

ISと呼ばれる兵器の登場により、世界のミリタリーバランスが崩壊した現在。国家群は『威信と反映』『利権と保身』を掛けた、際限無い軍備競争を繰り広げられていた。

一歩一歩緩やかに『破滅』へ向かう世界の中で、男で始めてISを動かした少年『織斑一夏』は、ある赤いISを身に纏った少女と出会う。

それは魔女との遭遇か、それとも女神との謁見か。果たして、その少女は少年に何を齎すのか。

赤と白が邂逅する時、この物語は始まる。

この小説は、IS＜インフィニット・ストラトス＞の二次小説です。また、原作に足りない部分を補完する意味で、オリジナル設定や自己解釈が多々存在します。

初投稿なので、いたらない点も多々あると思いますが、よろしくお願ひします。

## 第0話 序章 Prologue (前書き)

作者は小説書きとして未熟な上、文才もなく、政治にも軍事にも詳しくありません。

出てくる軍事用語や組織などは、ほぼ『知ったか』でございます。なので、それを踏まえてご覧になっていただけると助かります。

## 第0話 序章 Prologue

<デウス・エクス・マキナ>と呼ばれる組織がある。

この組織の創立を語るには、ISと呼ばれる兵器とそれが齎した世界情勢について語らなければならない。

IS。正式名称<インフィニット・ストラトス>。

稀代の天才『篠ノ之束』博士によって開発された超高性能マルチフォーム・スーツの総称である。

このISは、戦闘機に勝る機動性を有し、戦車に勝る防御力を誇る。その戦闘能力は高々一機で大隊を屠り、小隊を結成すれば国すら滅ぼせる代物であった。

そんな馬鹿げた兵器の登場により世界のミリタリーバランスが崩壊。今まであった軍隊の価値観は一変した。

この未曾有の事態に対し、世界はISについて協議する場『国際IS委員会』を設け、次にISの運用や開発を規制する条約『アラスカ条約』を制定した。

この条約により、ISの戦争への導入が禁止され、ISはスポーツへと はたして兵器同士の争いがスポーツと呼べるかは別として そのベクトルを変えていった。

これにより事態は収束に向かっていったのだが、それは表面上の話。

水面下では、限りあるIS 某事情によりISは467基しか存在しない の所有権を巡って、国家たちが激しい冷戦を繰り広げていたのである。

それもそのはず。ISには世界のパワーバランスを変えるだけの力がある。だから、どこの国もIS獲得に躍起になったのだ。ある国は軍事的優位性を維持するため、ある国は強国へと返り咲くため、ある国は威信と繁栄のために。

それぞれの国家がそれぞれの思惑を抱える中、越えてはいけないう線を越えてしまったのは、軍事大国アメリカだった。

彼らは 『世界の警察たる我々合衆国は世界秩序を守護する者として、最も多くのISを所有する必要がある。それを拒むものは秩序を乱す悪と見做し、場合によっては武力を行使する』 と過激な主張を行い、あるう事が国際世論の批判を払い除け、各国に軍事的圧力をかけたのだ。

冷戦から一変、この世界大戦の危機に、世界は否応なしにアメリカの要求を受け入れた。結果、アメリカは150以上のISを獲得したのである。

これにより、世は名実共にアメリカ中心の世界と化したのだが、同時に中東を始めとした各国の反米意識が高まり、世界情勢も悪化。欧州連合は武力国家『アメリカ』に対抗する策として、ISを主力にした統合防衛計画『イグニッション・プラン』を発案し、中国とロシアという共産諸国は手を結ぶことで軍備増強を図った。

やがて、世界の規範たる大国が軍拡に奔った事により『力こそ正義』という武力主義が主流化し、まるで籠が外れたように世界規模の軍

備競争が始まったのである。

そして、それらは留まることなく、今も激化の一途を辿っている。

こうして世界は、戦争の火種を燻り続けるだけの混沌とした時代へと突入したのである。

当然、その行く末を危惧する者達が現れた。

そんな彼らによって創立されたのが、『時の氏神』を意味する組織<デオス・エクス・マキナ>である。

この組織はどここの国家、宗教、民族にも帰属しない。故に愛国心や信仰心を持たず、己の利益の為にも戦わない。

ただ、彼らは肥大化する軍事力を牽制する抑止力として存在し、世界保全のために戦う。

具体的な活動は多岐に渡り、ある時は国家の暴走を止める抑止力となり、ある時は不穏な行動を見せるテロ組織を抑圧する。またある時は闇市場ブラックマーケットに流失したISやその機密がならず者に渡らないよう暗躍する、など様々。

場合によってはISによる武力介入も辞さないという過激派で、曰く『正義の使者』『独善的な偽善者集団』『秩序の番犬』などと揶揄された。

規模、資金源、技術力などの詳細については、一切不明。点と点を結んだだけの組織とも言われ、そもそも実体があるのかさえ分からなかった。

故に彼らの名が世間に知れ渡る事はなく、ただ闇深く、深遠の淵に存在し続けたのである。

そして、この物語の軸となる少女『アリス・リデル』は、そんな組織に属する一人であった。

私ことアリス・リデルは上司の呼出しを受け、狭い通路を一人歩いていた。

「ふはあ〜……」

私は眠気眼を擦りながら、手櫛で寝癖を整える。実は眠りの真只中に呼び出しを受けたのだ。まったくこういう職についていると、夜も昼も関係なく呼び出されるから敵わない。

さて愚痴るのもここまでにして。目的地まで少し時間が掛かるので、私の自己紹介でもしましょうか。

私はアリス・リデル。所属している組織に明確な階級がないので、ただのアリス・リデルです。

歳は今年で16。組織内では、主にISの操縦を担っています。特技はピアノと破壊<sup>サボタージュ</sup>工作。趣味はアニメ観賞。

容姿は紅髪碧眼。紅髪は高飛車でワガママなんて言われますけど、別にそんな事はないですよ。たぶん。

スリーサイズは、えっと……残念ですが、目的地に到着したようなので自己紹介はここで終わりにしますね。

私は目的地である部屋の前に立ち、二回ノックしてから返事を待つ。

『どうぞ』と返ってきたので、ドアノブを回した。

「失礼します」

室内に入ると、銀髪の美しい女性が出迎えてくれた。

気品に溢れた佇まいと優しそうな雰囲気。譬えるならその姿は、御伽噺きはなしに出てくる王女様のよう。現代には珍しいタイプの美女だ。名前はロリーナ。歳は確か24か5。落ち着きと美貌に定評のある私の上司だ。

「ごめんなさいね、急に呼び出して。さあ掛けて」

彼女が椅子へ座るよう促す。私は勧められるがまま、ソファアに腰を下ろした。

「貴女を呼んだのは、他でもないの。貴女に頼みたい事があってね」

「なんででしょうか？」

そう受け答えすると、彼女はガラス張りのアンティークテーブルにある資料を広げた。

私はその一つを手に取り、覗き込む。いくつかの写真と文面が目に入った。どうやら何かのパンフレットらしい。

「IS学園？」

と、表紙にはそう書かれていた。

IS学園といえば、IS運用協定 通称『アラスカ条約』に基づいて設立されたIS技術者育成の学校だ。

そのパンフレットを渡して、私にどうさせようというのだろう。まさかとは思いますが。

「実は貴女にココへ転入してもらいたいの」

彼女は淹れた紅茶を私に差し出しながら、そう言う。予感は見事な中した。

「貴女も知つての通り、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成されるわ。いわば、ISの登竜門ね。また『どの国家にも干渉されない』という特性上、ISの試験運用場としても使用されているわ。だから、IS学園には各国自慢の最新鋭機とそれを駆る優秀な操縦者が一斉に集うの」

彼女はゆったりとした動作で紅茶に角砂糖を入れ、かき混ぜながら続ける。

「そこで貴女にはココへ入学してもらって、その情報を私たちにリクしてもらいたいの」

「つまり密偵というわけですか？」

「そうね。引き受けてくれるかしら？」

「わかりました」

私は紅茶を一口啜り、了解する。

彼女は“頼み事”と言っているが、実質の任務依頼なので断る事はできない。それにIS学園には前から興味があったので、喜んで承諾した。

しかし、ただ一つ腑に落ちない点がある。

「でも、本来こういつた任務は<情報部>の仕事なのでは？」

私が所属する組織<デオス・エクス・マキナ>は、『情報部』『作戦部』『技術部』の三部門で構成されている。その内、偵察や諜報といった情報収集を行うのが『情報部』の仕事で、その部署から得られた情報を基に作戦を実行するのが、私の所属する『作戦部』である。なので、密偵といった任務が私に回されてくる事は珍しい。

「今はこの部署も人手不足だから。情報部も人員を割けないでいるのよ」

「なるほど。だから、作戦部にこのような依頼が」

「そういう事」

私は納得した顔で、もう一口紅茶を啜る。

人手不足なら仕方が無い。月並みの言葉だが、困ったときは助け合いが肝心だ。

「入学手続きはコチラでしておくわね。表の名目は<アトラス>の

推薦という事しておくから、そのつもりで」

<アトラス>とは、組織がその存在を隠匿する為に作り出したダミー会社、いわゆる隠れ蓑の一つだ。

<デオス・エクス・マキナ>はこういつた偽会社をいくつも抱えており、それらを通じて人材などを集めている。ちなみに<アトラス>の表向きは、ISの操縦や開発のコンサルティングを行う会社だ。

「あと<赤騎士>も持って行ってかまわないわ」

赤騎士。この組織が所有するISにして、私の専用機の名だ。

IS時代の始まりを告げた機体『白騎士』の名を肖り、赤騎士と名付けられたそうだ。

6ヶ月前にロールアウトしたばかりなのだが、既に『二次形態』セカンドフォームを終え、『単一仕様能力』ワンオフ アビリティも開花済み。

私、凄いでしょ、えっへん……と言いたいところだが、本当に凄いの、開発者である目の前の女性だ。

ロリーナは篠ノ之束に次ぐ天才と言われた女性で、ISの<コア>を独自で解析したらしい。厳密にいうと解析率72%だそうだが。

それでも凄い事ですよ。世界中の頭脳を以つてしても解析できなかった<ブラックボックス>を一人で解き明かしたのですから。おまけに美人でスタイルまでいいなんて、神様に愛されすぎです。

「そんなに褒めないで」

今じゃ私の心中までお見通しですからね、恐れ入ります。

「そうそう、アリス。〈赤騎士〉を持って行くのはいいけど、人前での使用は控えてね。〈赤騎士〉の〈コア〉はこのお国にも登録されていないから。もし委員会に目をつけられたら、密偵として動き辛くなるどころか、貴女自身の身柄も危うくなるわ」

ISは数に限りがある上、軍事力を左右する性能を有している。その為、国家間の保有数や所属について厳しい取り決めが成されている。

そんな状況下で無所属のISを露見させれば、所有者である私も当然、国際IS委員会の拘束を受けるハメになる。

もちろん、組織について口を割るつもりはないし、組織が機密保持の為、私を切り捨てても文句はない。

だが、最新鋭機の〈赤騎士〉を押収されるのは痛手だ。あれには多額の費用とオーバーテクノロジーの粋がすぎ込まれている。使用には細心の注意を払わないといけないだろう。

「委員会幹部には私たちの支持者も多スポンサーいから、最悪根回しは可能だけど、面倒事は無いにかざるわ」

「了解です」

「一応〈コア〉のダミー国籍を用意するつもりだけど、偽装工作にまだ時間が掛かりそうだから、詳しい事は後日連絡するわね。あとは……………えっと、これね、これ」

そう言ってドン！！と出される六法全書のような分厚い本。え、何です？電話帳ですか？

そんな私を尻目に、ロリーナはこれでもかと次々に分厚い本を繰り

出してくる。その数なんと3冊。

「これらは学園認定のISマニュアルよ。ISの運用方法から各システムの解説、国際条約なんか惜しみなく記載されているわ。入学までに必読しておかないといけならしいから、がんばって読んでおいてね」

IS周りには画期的なシステム、理論、技術などがふんだんに詰め込まれている。それらを解説し要約すれば、これぐらいの量になるのだろう。必要な知識とはいえ、この厚さだと気が滅入りますね。

私はその内の一冊を手に取り、パラパラと適当にページを開く。すると飛び込んできたのは、気が遠くなるような専門用語の羅列だった。これには思わず、呻いてしまう。

「そんなに気を落とさないで。私も読んだけど、簡単な事ばかりでスラスラ読めたわよ？」

「それはきつと貴女だけです」

私は断言した。この人、難解な量子力学の本を予備知識なしで読破したんですよ。そんな人に『スラスラ』と言われても説得力ありません。

とはいえ、私も伊達にISの操縦兵をやっているわけではありませんせんから、読破する自信が無いわけじゃないですけど。

「まあ、このままだと持ち運ぶのも大変だし、電子書籍化してから貴女のモバイル端末に送っておくわね」

「最初からそうしてください。こんなものをいきなり見せられたら心臓に悪いです」

「ふふふ、なら大成功だね。私、貴女をびっくりさせたかったの」

彼女はこういう性格なのである。いつも私をからかっては楽しそうに笑うのだ。

天才と馬鹿は紙一重というが、本当にそうかもしれない。彼女を見ているとつくづくそう思う。

そして、私はIS学園のパンフレットを持ち、ロリーナに一礼してから部屋を出た。

その後、パンフレットに目を通しながら、来た道とは違う方向へ向かう。

「ふむふむ。学園は全寮制なのですか」

しかも、設備は高級ホテルのスイートルーム並み。おまけに学食まで完備とは、さすが国立。

「あつ、制服可愛いですね。なにに？制服は改造OKなのですか。へえ、いいですね」

私はどういふ風にカスタマイズしよう。フリル？それともミニ？うん、迷う。

私は学園生活の妄想に花を咲かせながら、相棒の待つISの整備ドックへ向かった。

ISドックは地下に設置されている為、私はエレベーターを経由して地下へと下った。

狭い箱の中でしばらく待機し、B3という表示を確認してからエレベーターを降りる。

そこから少し歩くと、赤いISが片膝を着き、鎮座しているのが見えた。

纏う装甲は滑らかでありながらも剣呑。携えた二本の大剣と楯が機体の英姿を助長している。

その光景はまさに『姫に忠義を捧げる騎士』。さながら中世へタイムスリップしたような錯覚に囚われる。

そばに居た研究員の女性に声を掛け、搭乗許可を貰うと、私は<赤騎士>に乗り込んだ。

「DEM-cdl:No002アリス・リデル」

私がそう呼びかけると、<赤騎士>が呼吸し、私が私であるかを確認かめ始める。

<赤騎士>は生体認証バイオメトリックスによってロックされている。起動には私のバイタルサイン、つまり生体情報が必要不可欠。

声紋認証から始まり、指紋認証、網膜認証、静脈認証と次々認証が行われていく。呼びかけてから約0.5秒後、“彼女”が喋った。

《Hello My honey(こんにちは、私の愛しいアリス)》

》

オペラ歌手のような澄んだ声で、そう喋りかけてきたのは<赤騎士>に搭載されている人工知能だ。

正式名称は、量子制御型ニューロAI『赤の女王』。コールサインおよび起動コールは<レッドクイーン>。

そして、この<レッドクイーン>こそが、<赤騎士>最大の特徴なのだ。

この<レッドクイーン>はISの<コア>とリンクしており、シンクロ同調状態にある。そんな彼女と対話を重ねる事で、操縦者の意思を<コア>の深層にある『ISの意思』へとダイレクトに反映させる事ができる。

結果、ISと搭乗者は相互理解を深める事ができ、ISとの相性が頂点に達したとき発現する能力『ワンオフ単一仕様能力アビリティ』を高い確立で開花させられるのだ。

つまり、<赤騎士>は『インストー単一仕様能力』の発現を主眼に開発された機体なのである。

武装には、大型の高周波バスターブレイド《ヴォーパル》が二本とイギリスの技術を応用したソード型ビット《シュナイダー》が10機。以上が“彼女”の初期武装。ライフルなどの火器は一切積んでいない。

バススロット拡張領域は空いているのでインストール量子変換して追加する事は可能なのだが、開発者の意向で無理に拡張領域を空けてあるそうだ。曰く、現在開発中の専用装備の為だとか。

ちなみに、今の<赤騎士>は第一次形態だ。この機体は『第一次形態』と『第二次形態』を切り替えられるのである。

閑話休題。“彼女”の紹介はこのぐらいにして、話を戻そう。

「<レッドクイーン>、実は今度IS学園に入学する事になりましたね。それで貴女にIS学園に関する資料や情報を集めてほしいのです。お願いできますか？」

《Yes My honey 御心のままに》

私がそう言うと、<レッドクイーン>がインターネットに接続して、IS学園関連の情報をかき集め始めた。

続々と開示される情報群には、一般的なものから極秘扱いされているものまで多種多彩。その中で興味深いものを見つけた私は、表示された3Dウィンドウを拡大した。

「教師名簿？」

それはIS学園に勤務する教師の一覧であった。

「織斑千冬！」

名簿内に著名な人物の名を見つけ、私は声を上げた。

織斑千冬。ISに関わるものなら、この名を知らない者はまずいないだろう。

彼女は最強のIS操縦者として名高い。現役時代は無敗を誇り、IS世界大会<モンド・グロツソ>では、格闘技部門と総合部門で優

勝を果たした。以来、人は敬意を以って、彼女を<ブリュンヒルデ>と呼ぶ。

すると、<レッドクイーン>が私の好奇心を汲み取って、<織斑千冬>で検索を始めた。

すると、出てくる、出てくる。彼女の強さを説いた解説資料や現役時代使っていたIS<暮桜>のスペックデータ。中には千冬信者による非公式ファンサイトらしきものや、盗撮と思われる画像や動画まであった。

「現役を引退しても、この人気ぶり。凄いものですね。かくいう私も懂れてはいますけど」

それはさて置き、現役を引退した彼女がIS学園に勤務していたとは……。

でも、彼女ほどの技量があれば、IS学園に招かれて当然か。むしろ居ない方が不自然。

「あの織斑千冬に会えるのですか。これでまた一つIS学園に行く楽しみが増えましたね。では、レッドクイーン。あとで閲覧しますので、主要なファイルだけを抽出して、私個人のモバイル端末に転送しておいてください」

《Yes My honey ところで私への同行許可は?》

「もちろん、下りていきますよ。ただしIS学園では貴女おあやけの存在を公にできません。だから、設備があってもメンテナンスを受けないので、当日までに各システムと武装、PIC、ハイパーセンサー、非固定浮遊部位などのチェックを念入りしておいてください。も

し不備や必要なパーツがあつたらロリーナに「

《Yes My honey さっそく旅支度を始める》

言葉が終わるより早く、各部のチェックを行い、点検項目を消費し始める<レッドクイーン>。

せつせと旅の準備を進めるその様子は、まるで『遠足前の小学生』みたいだ。

「じゃあ、私はそろそろ行きますから。おやすみなさい、レッドクイーン」

《Yes My honey よい夜を》

そして、私は赤騎士に別れを告げ、自室へ向かう。さて、今から制服のカスタマイズ案を作成しないと。

## 第0話 序章 Prologue (後書き)

どうも、はじめまして。この文章を書いた者です。

今回は初めてのあとがきという事なので、ちょっと多めにあれやこれやを書きたいと思います。どうかご了承を。

それではまず、世界観といいますが世界情勢について。

この世界では、各国がISを主力にした破滅的な軍備競争に勤しんでおります。そのせいで国家間に軋轢が生まれていて、原作よりちよつとヤバメな状態です。そして、お決まりのように、その背後にはこれらを演出、促進する輩がいて……

次にオリジナルの組織<デオス・エクス・マキナ>ですが、『機動戦士ガンダム00』のCBをモチーフにしています。活動スタンスも同様です。ただし劇場版のCBをモチーフにしていますので、派手な武力介入はしません。

最後にオリジナル主人公『アリス』について。

最初は、定番のダブル男主人公にしようと思っていました。それで片割れをどんなキャラにするか悩んでいると、神様が言ったのです。

『オリジナル主人公を女の子にして、百合展開にしちゃえばいいじゃない。むふふ』

どうやら、神様はそつち系がお好きなようです。

ええ、これは神様が言ったのです。けっして私ではありません。違  
うったら違うのです。

でも、一応、主人公として『一夏』もいる事だし、片方ではハーレ  
ムを作つてよろしくやって、片方では禁断のあれやこれやをやる。  
そういうのもいいかなと。そんなこんなで、誕生したのがこの主  
人公です。

まあ、正直、私自身も今だタブーを犯した感が拭えていません。こ  
の女主人公が吉と出るか凶と出るか、わかりません。ダメならギア  
をバツクに入れて、全力後退するのみです

最後に、ここまで読んでくださった方。本当にありがとうございます。  
す。

もしご意見やご感想などを頂けたら、私はきつとうれしくて小躍り  
してしまう事でしょう。

では、大変長くなりましたが、どうぞよろしく願います。

題1話 入学前夜 P r e v i o u s n i g h t (前書き)

『娘(むすめ)』の読み方は『こ』でお願いします

## 題1話 入学前夜 Previous night

夕焼け空が夜へと化けていく時間帯。私は任務遂行のため、IS学園の最寄り駅へ向かう電車の中に居た。

本来なら昼前に到着するつもりだったが、初めての日本カルチャーに気を取られ　もとい、はしゃぎ過ぎてしまい　気づいたら、こんな時間になってしまっていた。

言い訳がましいかもしれないが、私は花も恥らう十五歳の乙女。オシャレなブティックや珍しい喫茶店があれば、フラフラと立ち寄ってしまう訳で……

そんなこんなで、IS学園行きの電車に乗り込んだ時には、午前7時を過ぎていた。

まあ、何もなければ、学園の門が閉まるまでに到着できるだろうから、特に問題はないだろう。

ちなみに、今私が乗っている車両は男子禁制の女性専用車両だ。さすがIS発祥の地だけはある、二本に一本がこの車両だった。これが女性優遇社会　女尊男卑の一片だという訳だ。

女尊男卑と女性優遇制度。

ISは革命的な兵器であったが、一つ大きな欠陥を抱えていた。それが『女性にしか扱えない』というモノだ。

その事によりISを使える女性の社会的地位が上がり、公共福祉、

社会制度、法律、何に置いても優遇されるようになった。これが世間一般で言われる『女性優遇制度』だ。

しかし、この制度の導入が社会の歯車を狂わし始めた。

この行き過ぎとも言える優遇制度によって、女性の発言力が強くなりすぎ、彼女たちの権力が肥大化。

それに反比例するように、男性の社会的地位が女性権力に押し潰される形で、どんどん失墜していった。

こうして出来上がったのが、女は尊重され、男は卑しまれる社会

女尊男卑だ。

今では『男女平等』など過去の遺物。ISが使えない男は蔑視され、女性の私腹を肥やすための労働力　　さながら、女王アリに仕える働きアリのような扱いを受けている。

無論、この差別社会に対して異論を唱える者もいた。しかし、いつの時代もそうであるように、弱者が権力者に楯突くと、その口に権力という名のマスタードをたんまり放り込まれるのだ。そうになるともう何も言えなくなる。黙殺されるのだ。

結局、女性優遇制度が導入されてからの10年間。男性たちは窮屈で息苦しい生活を強いられ続けてきた。

しかし、数ヶ月前、そんな男性たちに一筋の光明が差し込んだのである。

(織斑一夏)

私は車内の広告ディスプレイに表示された少年の名を口にする。

彼は『世界で初めてISを動かした男』として世間を賑わかせている人物だ。彼の登場で、良い意味でも悪い意味でも世界は荒れている。

もし彼とISの因果関係が解明され、男性がIS世界に参入できるようになれば、『女性優遇制度』はその存在意義が失われ、きつと廃止される。『女尊男卑』という社会も音を立てて瓦解する事だろう。そうなると『男性たちが雄々しく輝ける社会』が帰ってくるは必然的。まさに世の男性にとって『織斑一夏』は救世主と言えるだろう。

そして当然、私が所属する組織<デウス・エクス・マキナ>もIS適正を持つ彼に一目置いている。

だから、上司のロリーナが、私にこんな事を言っていた。

『彼は組織に必要な人材かもしれないから、口説いてモノにしてきてくれないかしら?』と。

ふう。奥手な私にそんな高等な事ができる訳ないでしょ。話しかけるだけで手一杯です。

まったく、そういう色仕掛けは大人の色気を漂わせる彼女がすべきですよ。話によれば、投げキッスだけで男がハイエナのように群がってくるとか。織斑一夏がどのような男性か知りませんが、彼女の色香ならイチコロでしょう。

その時、モバイル端末に一通のEメールが届いた。

<私が未成年の少年に手出したら、犯罪だもん？>

開くと、文面にはそう記されていた。

私は焦った様子で周囲を見回すが、当然彼女の姿はない。

彼女が読心術に長けている事は知っていましたが、まさか極東にいる人間の心まで読むとは……。

これには感心を通り越して恐怖を覚えますね。と、とにかく落ち着くために、素数を数えましょう。

0、1、1、2、3、5、8、13、21、34、55、89。

その時またメール。

<アリス、それ素数じゃない、フィボナッチ数列よ。動揺しているの？>

してますよ。貴女のせいだね。

結局、私は駅に着くまでの間、ずっと心のスイッチをOFFにし続けた。神様、プライベートって何ですか？

駅到着後、迎えはないとの事なので、私は徒歩でIS学園へ向かう。

「それにしても<イノベーター>みたいな上司の所為で、どっと疲れましたね。早くベッドで横になりたいです」

そんな事を思いながらIS学園の校門を潜ると、一人の少女が何かの施設を覗き見しているのが見えた。

その少女はIS学園の制服を着込み、黄色いリボンで髪をツインテールにしていた。更に肩からその小柄な体に似合わない大きなボストンバックをぶら下げている。

という事は、彼女も私と同じIS学園の編入者なのでしょうか。ちよっと声を掛けてみましょう。

「すみません。何を覗いているのでしょうか？」

私が呼びかけると、彼女はビクッと肩を躍らせた。なんか、ネコみ

たいな反応ですね。

「え！？ああ、これは……」

私を教員だと思ったのか（今は私服なので）、アタフタしだす少女。

私は動揺する彼女のスキをついて、施設の内部を覗き込んだ。施設内は砂と岩ばかりで、随分と殺風景な場所だった。どうやらここはIS用のアリーナらしい。

その中で二人の男女が何やら雑談をしていた。盗み聞きはよくないですけど、ちょっと耳を傾けてみましょうか。

「いつになったらイメージを掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ『くいつて感じ』って」

「だから、くいつて感じた」

どうやら男子生徒が女子生徒に指導を給わっているらしい。でも、会話の内容から察するに、うまくいっていないようだ。

（あの男の子は……）

ISを教わる男子。その人物には見覚えがあった。彼は確か『世界で初めてISを動かした男』織斑一夏だ。

(もう片方は……)

さすがにこちらには見覚えがなかった。いや、正確には見たことある気もするのだが、思い出す事ができない。これでも記憶力は良い方なのだが……

ともあれ、私は考えるのを後回しにして、例の少女へと向き直った。

「ふふ。なるほど。気になる男の子を遠くからこっそり盗み見ていたのですね?」

「ち、違っわよ。別にあんなやつ事なんか誰も見てないわよ!？」

私が冗談を口にすると、彼女はムキになって激昂してきた。でも、ネコが怒っているようでまるで怖くない。

でもまあ、東洋人は顔に出ないといいますが、嘘ですね。彼女の顔、真っ赤ですもの。

「ところで、あんた誰よ!？」

「あ、申し遅れました。私は今日付けでここに転入してきましたアリス・リデルと言います。貴女は?」

「な、何であんたなんか名前を教えないといけないのよ!!」

うっん。どうやら気になる男の子が異性と親しげにしていた所為で、虫の居所が悪いらしい。

「そうですか。名乗ってもらえないなら、仕方ありません。ツンデレさんとお呼びしますね？」

私がまた冗談を言うと、彼女は掛けていたポストンバックを振り上げた。投擲の構えだ。

「あたしをおちよくってんの？」

投げられては堪らないので、私は両手を挙げて白旗を振る。

「すみません。そんなつもりはないのです。でも、名前を教えてくださいないと、どう呼んでいいのか」

「わかったわよ。教えりゃいいんでしょ！私は鳳鈴音<sup>フヤン・リンイン</sup>。こつ見えても中国の代表候補生よ」

私はその言葉に少なからず驚いた。読んだ字の如く、彼女が中国を代表するIS操縦者　の候補生。

まさかこんな早期に有力者と接触できるとは運がいい。そうなること確かめておきたい事がある。

「代表候補生だったのですか。これは失礼しました。ところで候補生という事はやはり専用機を？」

「もちろん、持っているわよ！」

鳳さんは得意げに胸を張る、その小さな胸を………はっ!?

「あんだ、今胸の事バカにしたでしょ？」（ギロ

ロリーナといい、なぜこうも私の心は読まれるのだろうか。

「ご、ごほん。とにかく気を取り直して。」

「いえいえ、そんな事ありません。あのよかつたら、いいですか？」

「え？何？私のIS見たいの？」

「ええ。代表候補生といえば、国家の先鋭操縦者から選別されたエリート中のエリート。そんな方の専用機、見たくない人なんてこの学園にはいませんよ」

「ふん。でも、専用機持ちとして、タダで見せるわけにはいかないのよねえ」

と、もったいぶる彼女。しかし、これは正しい対応だ。

専用機持ちが安易に機体を晒すことは軽率である。なぜなら、このIS学園には私のような企業スパイが嫌ってほど蔓延っているからだ。いちいち他人のリクエストに答えていたら、直ぐ技術を盗まれてしまう。でも、私はこの手の交渉に長けている。

では、お見せしましょう。ネゴシエーターも舌を巻く華麗な交渉術を。

「では、お礼として学食のスイーツをたんまりと奢らせてもらいます」

「OK、今度見せてあげるわ」

「どうです？即答ですよ、即答。我ながら自分の才能が恐ろしいです。でもまあ当然ですよね。スイーツが嫌いな女の子なんていませんから。いるとしたら、その人はきっと糖尿病で糖分が取れない人です。」

「ありがとうございます。では、今度楽しみにしていますね」

と、約束を取り付けたところで、私は入学案内所に同封されていた校内地図を広げた。

「えっと、これから入学手続きの為、事務室に向かうのですが、鳳さんはどうします？」

「ああ、丁度よかった。あたしその事務室の場所が分からなくて困ってたのよね」

「そうですか。なら、一緒にしましょう」

そう言って、私と鳳さんは並んで学校敷地内を歩き出した。

「あんた、いいヤツね。私の事は鈴って呼んでくれていいわ」

私は鳳さん　　いや、鈴にバシバシと背中を叩かれながら歩く。

鳳鈴音、すこし乱暴な娘ですけど、明るくていい娘ですよ。私はそう思った。

それからすぐ総合受付事務所に辿り着いた。アリーナの後ろにあったのが、それだったのだ。

私と鈴は事務所の受付から書類一式を貰い、必要な項目を書き込んでいく。ほどなくして全てを書き終えた。

「ええっと、手続きは以上で終わりです。IS学園によろこそ。鳳鈴音さん、アリス・リデルさん」

愛想のいい笑顔を貰うが、心は強張る。なぜなら、この瞬間から私の密偵としての仕事が始まるのだから。

とはいえ、今日のお仕事はここで終わり。本格的な活動は明日からだ。

すると、鈴が受付台に身を乗り出し、事務員さんに詰め寄っていた。ん？一体どうしたのでしょうか？

「ねえ、織斑一夏って何組？」

なるほど、気になる男の子が何組なのか調べようというのですね。抜かりありませんね、鈴。

「織斑……ああ噂の子？彼なら1組よ。鳳さんは2組だからお隣ね。リデルさんは同じ1組だったかしら」

そうなのですか。これは幸運ですね。

ところで、鈴さん。そんな“代われや”的な視線を送らないでくだ

さい。対処に困ります。

「そう言えば、今一組が食堂で『織斑君クラス代表おめでとうパーティー』をしているみたいよ。よかったら参加してみたら？」

「いえ、今夜は謹んで辞退させて頂きます。長い旅路で少し疲れていますので」

「あらそう。じゃあ、今夜はゆっくり休んでね」

事務員さんもそれを察してくれたらしく、執拗に誘うようなマネはしてこなかった。

ただその時、鈴の目がキャピン！という怪しげな光を放っていた。何かよからぬ事を企んでいますね、鈴。

「あの、二組のクラス代表ってもう決まっていますか？」

「ええ、決まっているけど」

「名前は？」

「え？ええつと……聞いてどうするの？」

鈴の態度におかしなところを感じたのか、事務員の女性は少し戸惑った様子で聞き返した。

「お願いをしようかなと思って、代表あたしに譲ってって」

そう告げる鈴の背後にはダークなオーラが漂っていた。私にはそれ

が何か解った。あれは嫉妬の炎だ。

レッドクイーンが集めてくれた資料によると、この時期クラス代表によるクラス対抗戦というものがあるそうだ。

きつと彼女は2組の代表になって1組の代表、もとい女の子と仲良くしていた織斑一夏を合法的にフルボッコするつもりなのだ。ああ、彼女の行動力には脱帽です。そして、織斑君には合掌です。

それにしても女って怖い生き物ですね。……あ、私も女か。

その後、『見てなさいよ、一夏』と荒ぶる鈴と別れ、私は用意された部屋へと案内してもらった。

部屋はパンフレットで見たとおり、高級ホテルのスイートルームに勝るにも劣らない豪華な部屋模様だ。

バスルームにはシャワーしかついていない。入浴は共同浴場を使うらしい。が不満はない。あと自炊ができるようにシステムキッチンまで完備されていた。でも、私は料理ができない……

ちなみに、今のところ同居人は居ないそうだ。ここへ案内してくれた山田先生がそう言っていた。でも、今後の都合で現れるかもしれないとの事だ。

「ふう〜」

私は堪らず、荷物を放り投げ、ベッドに飛び込む。

「あゝフカフカして気持ちいい。このまま寝たいですう」

でも、まだやらなければならぬ事が残っている。上司のロリーナに定時報告を入れないといけない。

私は睡魔を跳ね除け、持ち込んだ荷物の中からノートPCを取り出す。そして文面を作成。特に報告する事もないので内容は簡潔なものだ。作成したテキストを暗号化して送信。これで本当に今日のお仕事はおしまい。おつかれさまでした、私。

その時、ノックの音が部屋に響いた。時刻は9時前。こんな時間に訪問者とは珍しい。一体誰だろう。

私は急いでPCの電源を落とし、『どうぞ』と対応する。すると、見知らぬ女性が入ってきた。

髪は艶やかなブラックのショート。ルージュの口紅が色っぽい。服装は学園の制服ではなく、紺色のフォーマルスーツを着ていた。どうやらココの教師のようだ。

「へえ、アンタがそうなの。思っていたより可愛い娘じゃない。もっと無愛想な女が来るのかと思っていたわ」

その女性は、男勝りな口調でズカズカと部屋に入り込み、ドカッとベッドの上に座った。

「アタシの事はロリーナから聞いてるでしょ？」

タイトスカートから伸びたすらつと長い脚を組み、そう尋ねてくる

女性。その言葉に私はピンときた。

実はIS学園に潜伏している組織の人間は私だけではない。“教師側”にもう一人、私のサポート役として密かに派遣されているのだ。そして、目の前の美女が、私をサポートしてくれる“教師側”の人間であるらしい。

「ええ。話だけなら。でも会うのは初めてですよね？」

「そうね。同じ傘下で活動しているんだけどね。で、アンタ名前は？」

「アリス・リデルです。貴女は？」

「エイダよ。よろしく」

そう名乗り、彼女は持ち込んだ缶ビールをプシュッと空ける。そして旨そうに喉を鳴らしながらビールを煽った。見事な飲みっぷりですね。某飲料メーカーからCMのオファーがきそうです。

それにしてもガッツそうな女性ですね。こんなので繊細なキジエント諜報員の仕事が勤まるのでしょうか……

「あ、今『こんなので大丈夫か？』って思ったでしょ？大丈夫よ。こう見えてもアタシ、イギリスの軍事情報局第6部の出身なのよ？」

イギリスの軍事情報局第6部。秘密諜報局とも言われる英国の対諜報組織だ。と、言われても解らないだろう。でも、<MI6

>といえればピンと来るのではないだろうか。

そう。〈MI6〉は映画『007』で有名な諜報員『ジェームズ・ボンド』が所属していた組織だ。

「もうやめちゃったけど、腕は鈍っちゃいないから安心して。それよりアンタの方こそ大丈夫なの？美少女なのは認めるけど」

「それこそ心配いりません。ISの操縦、戦闘、暗殺、潜入、破壊工作、全ての技術を叩き込まれていますから」

こう見えてもその手の技術には自信がある。まあ、自慢できる事ではないが。

「へえ。可愛い顔しておっかない女なのね。アンタと付き合う男は苦労しそうだわ」

「や、やっぱり、こういう物騒な女って男の人に敬遠されるのですよ  
うか？」

私は妙な気持ちになって声のトーンを落とす。

エージェントとして不謹慎かもしれないが、私だって花盛りの乙女。色恋事には興味がある。

そんな私を見てどう思ったのか、エイダは大きく口を開け、「あはは」と噴出した。

「急に淑やかなになったわね。まあ、大丈夫よ。『危険な香りがある女が好き』って男もたくさんいるから。でも、男の気を惹きたいなら、もう少し胸があった方がいいかもね」

「む、胸ですか」

私は自分の胸に触れる。残念ながらあまり大きい方ではない。丁度、片手に収まるぐらいの大きさだ。

でも、まだ15なので、大きくなる可能性は秘めているはずですよ、きつと。

「ところで、アンタの名前に“リデル”ってついているけど、それってもしかして？」

エイダが興味深げに私の名について指摘してくる。これには少し説明が必要だろう。

アリス・リデルの“リデル”。それは血族の繋がりを表す“ファミリーネーム”ではない。これは組織内で『代役が存在しない有能な人材』に対して付けられる識別子の一種なのだ。端的に言えば、極めて優秀な者の証である。

自分で言うのもアレだが、私の代理や後釜は存在しない。いるとしても早々見つからないだろう。私のIS適正值は異常だから。

「へえ、アンタがあのかルイスの子供たちだとね。まあいいわ、これアンタに差し入れ」

「お酒ならいりませんよ？」

そう言うと、エイダは『違っつて』とUSBのフラッシュメモリーと何かの資料を私に投げた。

「その中には、先日行われた織斑一夏とイギリス代表候補生セシリ

ア・オルコットの試合映像が入ってるわ。しかも模擬戦じゃないわよ？公式の試合形式に則ったガチファイト」

「それは興味をそそられますね。でも、模擬戦ならともかく、なぜ二人は試合形式の決闘を？」

「詳しい理由は知らないけど、先に吹っかけたのはイギリスらしいわ」

「へえ、意外です。すごく大人しそうな顔をしていますのに」

私は学籍プロフィールに張られていた顔写真を見ながら答える。

彼女の顔立ちはよく整っていて、気品に満ち溢れていた。肌も雪のように白く、クリーム色の金髪と相俟って実に可憐な少女だ。窓辺で詩集を讀んでいそうで、どう見ても争いを好みそうには見えない。どちらかというと血を見て気絶しそうな<sup>イメージ</sup>雰囲気だ。

「セシリアは今時の　女尊男卑の影響が顕著な娘でね、おまけにエリート意識が強くて、プライドも人一倍高いから、何かと癩癩を起こしやすいのよ。大方きっかけは、男でISを使える織斑が気に入らなかつたか。何か癩に障ることを言われたか、ってところでしょうね。きつと『わたくしを侮辱しますの？なら、決闘ですわ』てな感じで仕掛けに違いないわ」

「……意外と喧嘩っ早いんですね。イギリス人って紳士淑女のイメージが強かったですけど」

「そりゃ偏見ね。もしそうならアタシみたいなイギリス女がいる訳ないもの」

「自分で言っていれば世話ないですね」

「こっ見えても自分が変わり者って自覚はあるのよ」

と言って、エイダは笑いながらまたビールをぐっと煽った。

「んじゃ、渡す物は渡したし、そろそろ帰るわ。邪魔したわね」

そう言ってエイダは飲みかけのビールを片手に、ふらふらと部屋を出て行った。

私は礼をいい、再びPCを立ち上げる。そして、スロットにUSBメモリを差し込むと、撮影された映像を片端から再生した。それらをじっくりと観戦する。どうやら、今夜は眠れそうもない。

題1話 入学前夜 Previous night (後書き)

物語をだいぶん端折りました。いきなり、一巻後半からのスタートです。

なので、一夏VSセシリア戦はオールカットでございます。

けしてセシリアが嫌いといわけじゃないんですけど、物語を速く進めてヒロインを揃えたかったです。そう言うわりには話がぜんぜん進んでおりませんが(汗

そして、物語は鈴にスポットライトが当たっていきます。その次はシャル・ラウラ 篇 セシリアといった感じになる予定です。では、また次回。

## 第2話 入学当日 New Life

朝の強い日差しが部屋に差し込む中、私は机の上で目を覚ました。

どうやら、エイダに渡された試合の映像を解析しつつ、資料に目を通している内に寝てしまったようだ。

ふわぁ。ところで今何時ですか？6時半？よかった、今からシャワーを浴びても十分授業に間に合いますね。

という訳で、少しシャワーを浴びてきたいと思います。え？サービスシーン？お生憎さま、そのようなモノはありません。残念でしたね。では、行ってきます。

20分後

「さてと」

私は下着姿で、ベッドに並べたIS学園の制服を見下ろす。

トップスは特に手を加えておらず、デフォルトのまま。ただ袖口をレースで装飾してある。

ボトムスのスカートは、タイトではなくプリーツ。内側に同様のレースをあしらひ、二重構造にしている。

私はそれらを着込み、黒のニーソックスを穿く。最後に青色の棒ネクタイを首に巻いて、着替えは終了。

「残るは……これですね」

私はベッドに沈む赤いナイフを見る。実はこれが<赤騎士>の待機形態なのだ。

一般的にISの待機状態はアクセサリーの類である事が多いのだが、<赤騎士>は何故かこんな物騒な形態なのである。ロリーナ曰く『貴女を守りたいという気持ちの現れでは?』だそうだ。はは、泣けますね。

でも、今は困る。いくらIS学園が特殊な学校でも、ナイフなんて持ち歩いていたら絶対浮くだろう。

かといって置いていく訳にもいかない。

私は太ももにベルトを巻きつけ、そこに赤騎士を備え付ける。もし怪しまれたら護身用と言って誤魔化そう。

最後に姿見で身嗜みを整え、姿勢を正す。変なところは、なしつと。

「よし、これで準備OK」

時計を見ると時刻は8時前になっていた。すっかり着替えに時間を食ってしまったようだ。

私は急いで黒のローファアを履き、部屋を飛び出す。そこで気づく

あつ、朝ご飯、食べてない。

私は空腹を紛らわすように、お腹を撫でながら廊下を歩く。

昨日、案内してくれた山田先生の話によると『SHRであなたの自己紹介をしますので、直接教室へは向かわず、一度職員室に立ち寄ってください』という段取りらしいので、私はその足で職員室へ向かう。

その途中、昨日見た試合の映像を思い返した。

『織斑一夏VSセシリア・オルコット』。

試合結果はセシリア・オルコットの勝利で終わった。ただ、腑に落ちない点がいくつもあった。

その内の一つが勝敗の決した瞬間の状況だ。序盤はセシリアの<ブルーティアーズ>が流れを掴み、試合を優勢に進めていった。だが、終盤には織斑一夏の<白式>が一次形態移行　おそろしい事に初期設定のまま序盤中盤を戦っていたらしい　を終え、怒涛の快進撃を見せた。

そして、<ブルーティアーズ>を圧倒。間合いを確保し、一太刀浴びせようとした瞬間、それは起こった。

なんと、圧倒的優位を誇っていた織斑一夏が唐突に負けたのだ。敗因は<白式>のエネルギー切れ。

だが、シールドエネルギーを削られた様子はなかった。なら原因は何か。考えられる要因は二つ。

<白式>の整備不良による自滅か。<ブルーティアーズ>に特殊な兵装が搭載されていたか。

今日はその辺りに重点を置いて、探りを入れていくとしよう。

職員室に到着すると、私は職員の指示でその場に待機した。

それからしばしすると、例の彼女が現れた。そう、最強のIS操縦者 織斑千冬だ。

面持ちは剣のように鋭く、凛々しい。鍛え抜かれた姿勢は同性ですら魅了して止まない。

『綺麗な薔薇には棘がある』という言葉があるが、その言葉はまさに彼女の為にあるのではないだろうか。

もしかして彼女が一組の担任？織斑一夏といい、私はつくづく織斑家と縁がありますね。光栄な事です。

「お前がアリス・リデルか？」

「は、はい」

威風堂々とした雰囲気呑まれ、声が若干上擦った。

「よし、ついでに」

そう言つて踵を返し、コツコツと歩き始める。それだけの仕草なのに優雅さがあつた。

我に帰つた私は、急いで彼女の後を追う。

「織斑千冬さん、貴女があの名高いブリュンヒルデですよね？  
お会いできて光栄です」

「織斑千冬さんではない。ここでは織斑先生と呼べ。いいな？」

「す、すみません。織斑先生」

叱られ、また声の上擦つた。おまけに私の言葉に対しては、何も返事してもらえなかつた。

まあ、今のは私に落ち度があつたので仕方ない。

それ以降、話しかける機会を失い、結局タイミングを計っている内に教室へ到着してしまつた。

「ここで待っている。呼んだら入ってこい」

そう言つて織斑先生は、私を置いて一人教室へ入つていった。

さて、自己紹介をさせられるでしょうから、待っている間に発生練習でもしておきましょうか。第一声で噛んだら恥ずかしいですからね。では、ん、ん、ごほん、アメンボ赤いなあいうえ　　バシッ  
！！　　お？

今、ものすごい炸裂音がしましたが？何でしょうか？

私が音のした方向に目を遣ると、ツインテールの少女が織斑先生に出席簿で叩かれていた。　　ってあれは、鈴じゃないですか!?

なぜ二組の鈴が一組の教室に?まさかクラス対抗戦が待ちきれず、この場で織斑君を亡き者に?

すると、私の脳内でジャパニーズギャング『ヤクザ』に扮した鈴が、拳銃を片手に『命、取ったらあ!』と叫ぶ姿が再生された。まったく、そういう過激な事は映画の中だけにしておきなさいよ、鈴。

「鳳、もうSHRの時間だ。お前はさっさと自分の教室へ戻れ」

「え?ち、千冬さん!?!」

「織斑先生と呼べ」

そしてまた炸裂音。あまりに痛そうな音だったので、思わず私まで肩を竦めてしまった。

きつと今の一撃で鈴の脳細胞は五千個死にましたね。南無。

「わかったら、さっさと戻れ。そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

織斑先生の辛辣な言葉に、鈴はすごすごとドアから退いた。あの鈴を負かすなんて流石ブリュンヒルデだ。

しかしまあ、びゅーんと逃げていく鈴は、相変わらずネコみたいたった。

そして、私を一人置いてSHRが始まった。

S H Rから昼休みまで特筆する事はなかった。自己紹介も無難に終えたし、授業も遅れを取る事はなかった。

休み時間には『アリスさんはどこから来たの?』『IS適正いくつ?』『髪、綺麗だね』と恒例の質問攻めを受けたが、これもボロを出さず華麗に捌ききった。

ちなみに回答は『生まれはイングランドです (ダミー国籍)』『C+です (書類上のみ)』『貴女の髪も綺麗ですよ (本音)』という感じだ。

適正を低く見積もっているのは、皆の感心を遠ざける意図がある。私は密偵なので、注目されるよりされない方が動きやすい。

国籍はダミーだが、まったくの嘘という事でもない。イングランドは母の故郷なのだ。

さて、休み時間は一時間以上ある。この時間を活かして、織斑一夏に接触し      グウゝ

.....

そう言えば、朝から何も食べていませんでしたね。腹が減ってはなんとやら、その前に昼食にしましょうか。

あつ。いい事思いつきました。折角ですし、織斑君も食事に誘いましょう。

思い立ったら吉日。私はさっそく席を離れた。

<Side:一夏>

午前の授業が終わって昼休み。俺、織斑一夏は大きく背伸びして、深い溜息をついた。

未だISの事がチンプンカンプンな俺にとって、ISの専門講義はまさに地獄。おまけに実姉の千冬姉が担任だから、迂闊にうたた寝もできない。すれば、容赦ない出席簿アタックが待っている。なんていう拷問だろうか。

「しかし、あの鈴がIS学園に転校してくるとはなあ」

鈴っていうのは、俺のセカンド幼馴染の名だ。本名は凰鈴音。読み方はファン・リンイン。『おとりずずね』じゃないからな。ちなみに俺は略して鈴と呼んでいる。

鈴とは某事情で一年ぐらい前に離れ離れになったんだが、何の運命か、ついさつき再会したんだよなあ。

しかも、本人談によると今は中国の代表候補生らしい。一年見ない内に立派になったものだ。

「おい、一夏。話がある」

と男勝りな口調で話しかけてきたのは、黒髪のポニーテイルが特徴的な女の子、篠ノ之箒だ。

さつき鈴はセカンド幼馴染って言ったけど、箒がファースト幼馴染だ。箒は俺が子供の頃通っていた剣道場の娘で、付き合い自体は鈴より長いかな。ついでに言うと、鈴と箒は面識がない。色々あって入れ違いで俺と知り合ったんだ。

とまあ、幼馴染の紹介はこれぐらいにしてと。

「なんだよ、箒？」

「さ、さつき女子と随分仲良さそうにしていたが」

さつきの女子？ああ、鈴の事か。そりゃ、3年以上つるんだ仲だからな。仲がいいのは当たり前だろう。

んで、その鈴がどうしたって？

「その事について、わたくしも詳しく知りたいですわ」

と、上品な喋り方で問い詰めてきたのは、イギリスの代表候補生セシリア・オルコットだ。

入学当初は俺を目の敵にしていたのだが、クラス代表を決める試合で戦って以来、積極的に俺の世話を焼いてくれるようになった。なんでだ？ あっ、もしかして喧嘩の後に友情が芽生えるアレか？そういうノリって男同士だけだと思っていたんだけどなあ。男女の間でもあるもんなんだな。

「まあ、説明なら後ですから、とりあえず学食いこうぜ」

休み時間には限りがある。駄弁って昼食時間を減らすのはおしい。時間は有効に使おうぜ。

「まあ、お前がそういうならいいだろう」

「そうですね。行って差し上げない事もなくってよ」

よし、決まりだな。そう思って立ち上がると、三度目の声が掛かった。

「あの、もしよろしければ一緒に昼食を取りませんか？」

そう尋ねてきたのは、紅髪碧眼の女子。確か今日IS学園に転入してきた娘だ。名前はアリス・リデルだっけ。

アリスってあの『不思議の国のアリス』の主人公と同じ名前だよな。うん、ポピュラーでいい名前だ。

「ああ。いいぜ」

俺は即答する。食事は多い方が楽しいからな。

「筈たちもいいよな？」

「ああ、私がかまわない」

「わたくしもかまいませんわ」

というわけで、俺たち4人は、そろそろと学食へ移動した。

場面は変わって食堂。俺は食券販売機で日替わりランチを選択する。ここ数日、ずっと日替わりランチなのだが、まったく飽きない。当然か。日によって替わるもんな。

箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを注文していた。

そして、アリスはというと、未だに販売機の前で、うぐんと唸っていた。なんだ、なんだ？

「もしかして販売機の使い方、分からないのか？」

俺が親切に話しかけると、アリスは慌てて両手を振った。

「いえ、そうではなくて。思っていた以上に品数が充実していて、どれにしようかと」

なるほど、メニューの選択に迷っていたのか。わかる。俺も最初そうだった。

「まあ、これからずっと通うんだから、そんなに悩まなくていいんじゃないか？今日食べなかったものは、明日注文すればいいんだし」

「あ、そうですね。では、手始めはこれに、いやこれは明日にして、今日はこれを、いや……うぐん」

「おいおい、結局悩むのかよ！俺の助言ちゃんと聞いていたか！？」

「後列が詰まり出したので、俺は二度目の助け舟を出す事にした。一応言っておくが、俺の仏の顔は五度までだからな。うん、俺優しい。ちなみに千冬姉に仏の顔はないので、あしからず。」

「じゃあ、俺と一緒にのものにしたらどうだ？今日は鯖の塩焼きだからうまいぞ」

「あ、そうですね。では、そうします」

「そう言っただけでアリスは金を入れて、俺と同じ日替わりランチを頼んだ。よしよし、よく決断した。」

「一夏、ずいぶんとその子に優しいな（ムスッ）」

「そうか？」

「アリスは転校してきたばかりで、右も左も分からない娘だからな。誰かが面倒を見てやらないと。」

「それに俺はこれでもクラス代表だし、クラスの長として使命を果たしたまでだ。」

「やっと来たわね。待っていたわよ、一夏」

「全員が食券を買い終えたところで、どーんと現れたのは、セカンド」

幼馴染こと鈴だった。

理由はよく分らんが、どうやら待ち伏せしていたらしい。

「まあ、鈴、待っていてくれたのは嬉しいが、そこに立たれると邪魔だ。後がつつかえる」

ただでさえ、アリスがグズった所為で後列が押しているのだ。さっ、どいた、どいた。

すると、背後でぐうぐうと腹を鳴らす音が聞こえてきた。

「す、すみません、朝食を抜いてきたもので……」

そう白状したのはアリスだ。どうやら、彼女が腹を鳴らした張本人らしい。

しかし、腹が鳴るほど空腹だったのか。これはいかな。早く鈴に立ち退きを要求しなくては。

「ほら、今の聞いただろ？アリスは腹の虫が鳴くほどハラペコなんだ。だから、早く道を空けてやってくれ」

な！と俺が強く同意を求めると、アリスは耳まで赤くなった。おお髪も赤色だから、本当に真っ赤だ。

「い、一夏、あんたね……」

なぜか俺を半目で睨みながら、道を空ける鈴。なんだ、俺なんか悪い事言った？

「前々から思っていましたが一夏さんにはデリカシーというものが無さ過ぎですわ」

と俺の足を踏んでいくセシリア。うわっ、いてっ！

「自業自得だ」

そして痛がる俺を無視して、そそくさ去っていく筈。アリスはアリスで、真っ赤なまま俯いて通り過ぎていった。

何だよ、一体、俺が何をしたっていうんだ……。

ともあれ、俺たちは席を確保し、鈴を加えて食事を始めた。

昼食の話題はというと、俺と鈴の『お互い一年の間、何をやっていたか』に占められていた。

「鈴、いつ帰ってきたんだ。おばさんは元気か？いつ代表候補生になっただよ」

「質問ばかりしないでよ。あんたこそ何IS使ってるのよ。ニューズ見た時びっくりしたじゃない」

丸一年ぶりの再会という事もあって、とにかく話が弾んだ。

その所為で、少し周りの人を置き去りがちにしていたが、そこは勘弁してほしい。

「ゴ、ゴホン！一夏、そろそろどういう関係なのか、説明してもらいたいのだが？」

「そうですね！一夏さん、もしかして、こちらの方とお付き合いし

てらっしやいますの!？」

疎外感を感じてか、やたら棘のある言葉で箒とセシリアが言い寄って来る。

よく見ると二人の箸は全然進んでいなかった。なんだ、昼飯そつちのけか？

「お前ら、少し落ちつけ。アリスをしてみる。静かにメシ食ってるぞ」

そう言つてアリスに視線をやると、彼女は嬉しそうに鯖の塩焼きを頬張ろうとしていた。でも、箸がうまく使えないのか、解した身を口に持つていつてはポロツと落としていた。その後も、ポロツ、ポロツと運んでは落とすという作業を繰り返す。次第に彼女の目に涙が

「ちょっと待つててくれ。フォークかなんか貰つてくる」

日替わりランチを進めた本人である俺は、すごく居た堪れなくなり、箸に替わる物を食堂へ取りに向かった。

「やっぱり、アリスには優しい（ムスっ）」

箒がなんか呟いていたけど、聞き取れなかった。まあいいや。それよりフォークとスプーンだ。

<Side:アリス>

「すみません、ご迷惑おかけします」

「いや、俺こそすまん。箸が使えないとは思ってなくて」

「いえいえ。今度からは使えるよう練習しておきますね」

「おっ」

そう言ってもらい、私は織斑君からフォークとスプーンを受け取った。

これでようやく食事に取りつける。うーん、鯖の焼けた匂いが香ばしい。食欲をそそられますね。

「それで何の話だったっけ？」

と織斑君。あ、すみません。話を脱線させてしまったようで。もぐもぐ。

「二人がどういふ関係か聞かせてほしいのだが。そ、その二人はやはり、つつ付き合っているの……か？」

熱を帯びた頬で、しどろもどろに言う篠ノ之さん。もしかして、彼女も織斑君に懸想しているのでしょうか？

それにしても、篠ノ之箒さんってどこかで見た事あるのですよね。篠ノ之箒、篠ノ之、しののの………束。

「あっー!」

「ど、どうした、アリス。急に声をあげて」

「え、あ、いや、鯖の小骨が喉に刺さって……」

「そ、そうか。気をつけろよ」

「は、はい」

はしたなく大声を出してしまったが、無事思い出す事ができた。

篠ノ之箒。あの稀代の天才にしてISの開発者『篠ノ之束』の妹さんじゃないですか。

さすがご姉妹、よく似ていますね。美人なところとか、胸が大きいところとか。

ああ、モヤモヤが晴れてスッキリしました。これで心置きなく食事が取れそうです。

「で、なんの話だったけ？」

と、織斑君。すみません、何度も話を脱線させてしまって……

「だから！！ お二人の関係ですわ！！アリスさん、これ以上妙な横槍を入れたら承知しませんわよ？」

「す、すみません」

ついにイギリス代表候補生のお叱りを受けてしまった。

はあくなんか今日の私、怒られてばかりな気がします。でも、相変わらず鯖は美味しい。

「そうだったな。実は俺と鈴は幼馴染なんだ。別に付き合ってるわけじゃねえよ」

へえ、鈴と織斑君は幼馴染の間柄だったのですか。少し意外ですね。何が意外かって、国籍が違う幼馴染って珍しくありません？

「幼馴染？」

と、怪訝そうな顔で聞き返したのは、篠ノ之さんだ。確か織斑家と篠ノ之家って交流があったんでしたっけ。

では、篠ノ之さんも織斑君と幼馴染の間柄なのでしょうかね？もぐもぐ、このおひたし美味しいですね。

「あゝ。えつとだな。箸が引越していったのが、小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは、小五の頭なんだ。それで中二の時の終わりに国へ帰ったんだよ」

なるほど。入れ違いで織斑君と知り合ったから、鈴と篠ノ之さんはお互い面識がないのですか。

「んで、こつちが箸。前に話しただろう。小学校からの幼馴染で、俺が通っていた剣道場の娘」

「ああ、あの篠ノ之博士の妹さんだったっけ？」

鈴は不審者でも見るような目でジロジロと篠ノ之さん（特に胸）を観察する。

篠ノ之さんも篠ノ之さんで、負けじと鈴を睨み返していた。

「あたしは、凰鈴音。よろしくね、篠ノ之箒さん（てか、なんつーうらやましい胸してんのよ、この娘!？）」

「ああ、こちらこそよろしくだ、凰鈴音（幼馴染だど？幼馴染は私だけではないかったのか!？）」

一見、友好的に見えた二人だったが、視線の間にはバチバチと火花が散っていた。

しかも、背後で龍と虎が睥睨し合っている。もしかして、これが噂に聞く修羅場というヤツだろうか？

「んんん、ごほん。わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生・凰鈴音！」

そこへ勇ましく介入したのは、オルコットさんだ。

オルコットさんは胸を反り、片手を腰に添えて、ビシッと言い放つ。偉そうな態度もオルコットさんがやると実に様になる。私がやっても、きつところはいいかない。

「……あんだ誰？」

でも、残念ながら鈴にその勇ましさは伝わることはなかった。

「わ、わたくし、イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですてよ。まさかご存じないの!？」

「うん、あたし他の国とか興味ないから」

さすが鈴。英国貴族のお嬢様をこうもバツサリ斬るとは、恐れ入り

ます。

でも、もう少し言葉に気をつけた方がいいのでは？いつか不敬罪で訴えられますよ？

「い、い、言っておきますけど、わたくし、あなたのような方には負けませんからね」

「そ。でも戦ったら、あたしが勝つよ。あたし強いもん」

「言いましたわね、凰鈴音！！でしたら、わたくしと決　　」ところでさ、一夏あんたクラス代表なんだった？」「

憤慨するオルコットさんに、見事なスルースキルを発動する鈴。

調子を狂わされたオルコットさんは、憤りを晴らすようにその場で地団駄を踏んだ。

そんな彼女を置き去りにして、話は進んでいく。

「えつと、まあ、成り行きでな」

「そう。あ、あのさ。よかったら、あたしがISの操縦、教えてあげてもいいわよ？」

すると、ドン！！とテーブルを叩いて、篠ノ之さんとオルコットさんが勢い良く立ち上がった。おとつと、私のお味噌汁がこぼれるつ。

「勝手な事言うな。一夏に教えるのは私の役目だ！　なんせ、わたしは一夏の幼馴染だからな。気兼ねないというものだ」

「勝手を言わないでくださる？一夏さんを指導するのは、このわたくしですわ。なんせわたくしは代表候補生ですから。これ以上に適したコーチはおりませんわ」

篠ノ之さんとオルコットさんは、見事にハモリながら自分のアドバンテージを主張する。

でも、お二人方、失念していませんか？鈴の立場を。

「なら、あたしが適任ね。だって、あたし一夏の『幼馴染』で中国の『代表候補生』だもの」

『ぐっ！』

これまた見事にハモリ、二人は言葉を詰まらせた。

そう、鈴は篠ノ之さんとオルコットさんの両方のアドバンテージを持ち合わせている。自分たちのアドバンテージを主張しても、鈴が有利になるだけなのだ。そう言った意味では、鈴は二人の天敵かもしれない。

「だ、だとしてもだ！！」

それでも二人は何かないかと食い下がる。どうやら彼女たちの辞書、改め恋に撤退の文字はないらしい。

そういう二人の力強さを、私はうらやましく思った。私は奥手だから、こつ、押しの強いアプローチができない。

「そもそも一夏は一組の代表だ。敵の施しは受けん。二組がでしゃばるな」

「そうですね、一夏さんは一組の代表。一組の面倒は一組で見るのが当然ですわ」

一組の面倒は一組で見るのが当然。その言葉に、私の電球がピコンと閃いた。

「あの、よければ、私もご指導してもらえないでしょうか？一応、私も1組ですし」

オルコットさんは一組の面倒は一組で見る、と言った。なら、同じ一組である私も面倒を見てもらえるのでは？と、私は踏んだのだ。もちろん、指導を給わりたいというのは建前で、本当は代表候補生である彼女たちに近づく為の口実だ。まあ、素直に親睦を深めたいという気持ちも大いに在るのだけだ。

「え、アリスさんもですか？」

私の突拍子もない提案に、織斑君を除く全員が面を喰らっていた。

「あ、ご指導は厚かましかったですね。では、織斑君の訓練を横から見学させてもらってもいいですか？」

「おお、いいぞ。てか、見学なんて言わないで、一緒に訓練受けようぜ」

「そうですね？では、お言葉に甘えて」

織斑君は意外とあっさり受け入れてくれたものの、篠ノ之さんとオルコットさんはやや不満げだった。

それもそうだろう。彼女たちが特訓の指南を買っているのは、おそらく織斑君と二人きりになる口実を作るため。それを邪魔されるかもしれないのだから、良い顔をしないで当然だ。

でも、私は彼女たちの恋路を邪魔するつもりは更々ない。私は無粋でもKYとやらでもありませんから。

「あの篠ノ之さん、オルコットさん、少しいいですか？」

そう言っただけで私は、篠ノ之さんとオルコットさん呼び寄せる。そして、こつこつ耳打ちした

「勿論、教えて頂くからには、お二人方と織斑君の仲を取り持ちます。私は指導を給わりたいだけなので」

すると、二人の険しかった顔がみるみる綻んでいく。効果覲面はこの事ですね。

「そ、それは本当ですか？」

「わ、わわわ、私は、べ、別に一夏とそういう仲になりたいわけじゃ  
「

「では、わたくしだけ取り持つてくださる？」

「いや、待て。折角の厚意を無駄にするのは、アレだろう。私もその厚意を受けさせてもらう」

「ふふふ、分かりました。ではよろしくお願いしますね。篠ノ之さ

ん、オルコットさん」

こうして、二人の了承　口車に乗せたとも言う　を得て、私は  
彼女らの特訓を受ける事となった。

そうそう、後で鈴にも何かしてあげないとフェアじゃないですよ  
ね　って、あれ？私この学園に恋のキューピットをしに来たの  
でしたっけ？いやいや、私は密偵として……まあいいです。情報を  
貰うだけではアレなので、これぐらいの事はしましょう。織斑君、  
鈍そうですし。

## 第2話 入学当日 New Life (後書き)

三話目にして、ようやく我が主人公『織斑一夏』の登場です。

しかし、まあオリ主アリスとの絡みが少ないこと少ないこと。昔からの接点がないというのもあるんですけど、後半からの絡みが一切ない。いかに作者に能力がないかが露見しましたね。

しかし、次回からは一夏がアリスをいじり倒します！！（エロい意味じゃないよ？）

と、いうわけで次回またお会いしましょう。

<Side:一夏>

放課後。セシリアにIS操縦を教わる為、俺は第三アリーナへ向かう。

一緒に指導を受けるアリスは、訓練機の使用許可を貰う為、一度事務室の方に寄ってから来るそうだ。

「ん？」

アリスより一足早くアリーナに着くと、そこには純国産IS<打鉄>を装備した筈が立っていた。

ISを装備した筈は初めて見るので、思わず間の抜けた顔をしてしまう。

「な、なんだ、その顔は。おかしいか？」

「い、いや、似合っているよ」

うん、本当によく似合っている。打鉄の武者を模した堅牢さと和の風格が、実に筈の雰囲気とマッチしていた。そこに専用武装の刀型近接ブレードが加われれば、まさにラストサムライといった感じだ。

その格好で外国のイベントに参加したら『Oh! Samurai Girl!』とかいって持て囃はされそうだな。

「ギロ」

うわ、睨まれた。てか怒るなよ。褒めたんだから。

俺が怖気づいていると、その隣でセシリアが表情を強張らせていた。何？セシリア、サムライ怖いのか？そりゃ頭に矢の刺さった落武者とかだったら、俺も怖いけど。

「くっ。まさかこんなにあっさり訓練機の使用許可が下りるなんて……」

と悔しがるセシリア。

なぜ、そこを悔しがる。訓練機の使用許可が下りれば、セシリアはラクできるのに。

「よし、一夏、訓練を始めるぞ。白式を展開しろ」

「お、おう」

俺は言われるがまま白式をコール。粒子が俺を包み、瞬く間に白い装甲が周囲に展開される。

そして、〈白式〉唯一の武器《雪片式型》を展開して、正眼の構えを取った。

冷然とした雰囲気周囲に広がる。おそらくこれが殺気と呼ばれるものだ。

「では、参　　！？」

緊張感がピークに達した時、青い物体　　セシリアのISS〈ブル―ティアーズ〉が俺の視界を遮った。

「お待ちなさい。一夏さんのお相手をするのは、このセシリア・オ

ルコットでしてよ」

「ええい、邪魔をするな。今日は私が一夏に稽古をつけるのだ。セシリアは下がっている」

「いえ、断固拒否しますわ!」

「ならば斬る!」

何でそうなるんだよ。お前は辻斬りか　　て思っている内に、箒が袈裟斬りを繰り出した。

セシリアはそれをあらかじめ展開しておいたショートブレード《インターセプター》で受け止める。更に後ろへ跳躍して剣撃の勢いを殺し、そのまま射撃に必要な間合いを確保した。

「訓練機に遅れを取るほど、このくブルーティアーズは優しくな  
くてよ」

そう言うが早く、流れるような動作で《スターライトMk?》を展開。瞬時に安全装置を外し、トリガーを連続で絞る。

「　　甘い!」

箒は超高速で飛来する光の弾丸を紙一重で躲す。

さすが剣道をやっているだけはある、反射神経と動体視力が抜群にいい　　って感心している場合じゃない!!

「おい、俺の訓練はどうした!」

と叫ぶが、バトルフィールドを上空へ移した彼女らには聞こえない。  
オープンチャネル  
公開回線を使えば聞こえるようにできるのだが、しない。だって妙な横槍を入れたら、こつちが酷い目に遭いそうなんだもん。そこ！チキンとかいうなよ！ISを使ったリンチは冗談じゃすまないんだからな！！

「随分と派手にやっていますね。模擬戦ですか？」

と言ったのは、遅れてやってきたアリスだ。

「あれ、誰と誰です？」

アリスは目を細め、上空を凝視する。アリスはISを展開していない為、ハイパーセンサーの恩恵を受けていない。だから、遙か上空にいる筈とセシリアが米粒ぐらいにしか見えていないのだろう。誰か視認できないのは当然だ。

「筈とセシリアだ」

俺が教えてやると、アリスはキョトンとした。

「え？なぜ二人が戦っているのです？二人は織斑君に教える側の立場でしょ？あ、もしかして“技は見て盗め”というヤツですか？」

「いや、違うと思う。なんか、どっちが俺の相手をするかで揉めなさ、ああなっただ」

「なるほど、一人の男性をめぐって争いを……ふふ。罪な男ですね、

織斑君は」

彼女の言っている事がよく分からない俺は首を傾げた。罪ってなんだ？よく分からんが、俺は潔白だぞ。

てか、アリスに『織斑君』って呼ばれるの、なんか、こっ、ムズ痒いな。他の女子からは散々『織斑君』って呼ばれているだけだ。

「なあアリス、一夏でいいよ」

「うん？」

「俺の事は“織斑君”じゃなくて一夏って呼んでくれ」

「な、名前で呼ぶのですか」

「そうだけど、なんだ？抵抗あるのか？」

「いえ、あの、男の人を名前で呼ぶのが、その、なんか照れくさくて……」

アリスは照れながら人差し指同士をちょんちょんと合わせる。心なしか頬もほんのり赤い。

もしかしたら、彼女も他の女子と同様に男のいない環境が育ったのかもしれない。でも、男の名前一つ呼べないようじゃ、恋愛の一手もできないぞ。

「そんな事で照れるなよ。名前を呼ぶだけだぞ。ほら呼んでみる」

「そうですか？で、では、失礼して……一夏、さん」

アリスは上目遣いで、すこし照れくさそうに俺の名前呼んだ。って  
“さん”付け？

「さん”はいらねえって。ほら、もう一回言ってみるよ。イ・チ・  
カって」

「は、はい……い、一夏」

「そつだ、良く言えたな」

こんな事で褒めるのもバカらしいけど、まあアリスが上機嫌だから  
いいか。

「ふふ、一夏」

「おう」

「一夏」

「なんだ？」

「一夏？」

「そ、そんなに何回も呼ばなくていい」

名前を連呼される事に気恥ずかしくなってきた俺は、アリスにスト  
ップをかける。

すると、アリスも浮かれていた自分に気付き、耳を真っ赤にした。

「す、すいません、調子に乗りました。でも、一夏って、いい名前ですよね」

「だろ？俺も気に入ってる」

俺たちを捨てた両親に唯一感謝するとすれば、この名前をくれた事だろう。

にしても、俺が『一の夏』で姉が『千の冬』。もし妹か弟ができていたら、『百春』とか名付けていたんだろうか。

まあ、どうでもいい話だな。俺は頭を振って、意識を切り替える。すると、アリスがこちらを見ていた。

「そう言えば、一夏ってオルコットさんと戦ったのですよね？」

「ああ。負けたけどな」

初陣にしては、結構イイ線いっていたと思うんだけど、負けは負けだし、男らしく認めよう。

「私、その時の映像を拝見させてもらったのですが、序盤はともかく終盤では織斑君の方が圧倒していたと思うのです。でも、最後の最後に負けてしまいましたよね？それも唐突に。なぜです？」

「ああ、それは白式の能力の所為だな」

「白式の能力？」

「ああ。正確にはこの《雪片式型》の能力なんだけどな」

首を傾げながら疑問符を浮かべるアリスに、俺は《雪片式型》を掲げながら続けた。

「この《雪片式型》には、相手のエネルギーの残量や性質に関係なく、それを無効化する能力があるんだ」

「つまり、シールドバリアを始めとしたエネルギー体全てを無効化できるという事ですか!？」

アリスが目を見開いて驚く。そりゃそうだろう。

エネルギーの量や質に左右されず、それを無効化する。物理学を無視したそれは、最早科学というより魔法に近い。そんなチート能力があるなんて、にわかには信じられないだろう。正直、俺も驚いたもん。

「でも、それを行うには膨大なエネルギーが必要?」

お?この娘、鋭いな。俺、千冬姉に教えてもらうまで気付かなかつたのに。

「その通りだ。この《雪片式型》の能力を発動するには、莫大なエネルギーが必要なんだ。しかも、それを補う為にシールドエネルギーまで攻撃用に転化しないとイケない。それにしても、よく分かったな」

「ええ。強力な武器ほどハイリスクかハイコストと相場が決まっていますから。エネルギー無効化攻撃なら、それぐらいの代償があって当然かな、と」

なるほど、ちゃんと根拠があったのか。俺も根拠を以って相手の弱点とか言い当ててみたいものだ。

「という事は、《雪片式型》を多用し、肝心な時にエネルギー切れを起こした、という訳ですか？」

う、確かに自滅には違いないけど、こうハッキリ言われると情けなくなるな……

「でも、逆に言えば《雪片式型》の攻撃が当たっていれば、勝てたかもしれないんですよ？」

「たぶんな」

ISのシールドバリアーが貫通、あるいは無効化されると、《絶対防御》と呼ばれる機能が働く。

その機能が働くとISの全エネルギーが防御に回され、あらゆる攻撃から操縦者を守ってくれる。しかし、その代償に膨大なエネルギーが消費され、戦闘継続が不可能になるのだ。だから、あの時《雪片式型》のエネルギー無効化攻撃を喰らわせられていたら、＜ブルーティーズ＞の《絶対防御》が発動し、勝利できていたかもしれないのだ。

「ああ〜そう思うとすげー悔しい。俺がもっと＜白式＞の事を熟知していればなあ〜」

「でも、その事を学習できただけでも、今回の決闘は有意義だったと思いますよ？」

アリスが慰めるように俺へ微笑みかけると、《スターライトMk？

》の流れ弾が近場に着弾した。

その衝撃で、砂嵐が舞い、俺たちの周囲に暴風が駆け抜ける。

俺はISを纏っているので平気だったが、生身のアリスはそうもいかない。特に風に弱いスカートなんかは……。

「きゃ!?!」

アリスは真っ赤になって捲れる上がるスカートを押さえるが、白式のハイパーセンサーの方が早かった。俺の眼前に、鮮明かつ拡大化された逆三角形の布が映し出される。

スカートの中は 白式だった。つまり純白。

「み、見ました?」

アリスが涙声で問ってくる。  
いや、これは、どう言ったらいいのか、不可抗力というか、男の性さがというか。

「見たんですね。しかも、ハイパーセンサーのダイレクトビューまで使って」

口を“へ”の字にして、ムスッと怒り出すアリス。

当然といえば当然の反応なのだが、全然怖くないというか。どつちかという可憐いかな。こっ、ちよっかいを出したくなるような感じの。いやいや、そんな事思っている場合じゃないな。

「もお、一夏のスケベっ！」

アリスは怒ってく白式への装甲を蹴った。こら、そんな事したら自分が痛いだけだぞ。

「い、痛いですう〜」

ほら、みる。だから言ったのに。てか、蹴った爪先を押さえてケンケンするな。またパンツ見えるぞ。こっちにはハイパーセンサーの視覚補助機能があるんだから、気をつけてくれ。

「こ、こんな事なら、もっと可愛いものを穿いてくればよかったです……」

パンツを見られた上、痛い思いをするなんて、段々彼女が不憫に思えてきたな。

う〜ん、『編み込まれたレースとワンポイントのリボンがオシャレで、十分可愛いパンツだったぞ』とフォローするべきだろうか。いや、でも、見た本人が言くとタダの変態に思われん？

< 警告：ブルーティアーズにロックオンされました >

「へ？」

俺が呆けた顔をしている内に、セシリアの狙撃が俺の腹部を打ち抜いた。

シールドバリアーで身体は無事だが、勢いは殺せない。俺はコントみたいひっくり返った。

そんな俺を見下すようにすうーと下りてくるセシリアのくブルーテ  
イアーズ>と箒のく打鉄>。

その光景はまさに女神光臨。でも、微笑は浮かべていない。代わりに  
青筋を浮かべていた。どうやら女神たちは非常にご立腹らしい。

「一部始終、ハイパーセンサーで拝見させて頂きましたわ。一夏さ  
ん」

「男の風上にも置けない奴め。その性根、叩き直してやる」

そして俺はわりを食うのだった。

特訓を終えた俺は、制服に着替えた後、満身創痍の身体を引きずり  
ながら自室に戻った。

結局あの後、俺は二人からキツイしごきを受けた。もう、あれは訓  
練とは名ばかりの虐待行為だったな。訴えたら勝てるのではなかる  
うか。

でも、流石に箒も悪いと思ったのか、『シャワーを先に使ってもい  
いぞ』と気を遣ってくれた。うん、それは凄くありがたい。まあ、  
欲を言えば、湯船に浸かりたいところだが、それは無理な話だな。  
だってIS学園は女の園。分かるだろ？男湯がないんだ。でも、山  
田先生が『いつか男子も入浴できるよう、時間を割り振る』と言っ  
ていたので、それに期待しよう。

「遅かったじゃない、一夏」

と、疲れた俺を出迎えてくれたのは、セカンド幼馴染の鈴だった。

鈴は俺の部屋の前で、自前のボストンバックをクッション代わりに足を組んでいた。

その姿は、まるで不貞腐れて家を飛び出した家出娘のようだ。断じて口には出さないが。

「今特訓が終わったところなんだよ」

「そうなんだ。じゃあ、これあげる」

そう言って、鈴が何かを投げる。それはスポーツドリンクだった。しかも、ぬるいやつ。

さすが鈴。俺の事分かっている。俺は『スポーツ後の飲み物はぬるいもの』と決めているのだ。実は冷えた飲み物の一気飲みは身体に悪いんだぜ？

「おお、悪いな、鈴。サンキューな」

「いいわよ、お礼なんて、別に」

俺が笑って礼を言うと、鈴はプイっと横を向いた。ちょっと頬が赤かったが、風邪か？

「まあ、立ち話もあれだし、中に入れよ。茶ぐらいならご馳走するぜ？」

「じゃ、じゃあ、そうしようかな」

『おう、そうしろ』と俺はドアのロックを解除して、部屋に鈴を招き入れる。

そして『好きなところに掛けてくれ』と声をかけ、茶葉の入った急須に湯を注いだ。

「と、ところで一夏、あんたって一人部屋なの？」

「いや、私と住んでいる」

と、答えたのは俺じゃない。音も無く現れた箒だった。

てか、いつ帰ったんだ。『ただいま』くらい言えよ。びっくりするじゃないか。

「一夏は私と住んでいる」

お、二回言った。なんだ？重要な事なのか？

すると、急に空気が張り詰めた。心なしか淹れた茶が波打っているんだが、幻覚か？

おまけにゴゴゴという地鳴りまでする。幻覚と幻聴に襲われるとは、俺重病だな。今度医者に見てもらおう。

「へえ〜そうなんだ。じゃあ、私と部屋代わってくれない？」

と鈴。すると、箒の眉がぴくぴくと動いた。あっ、箒が怒ってる。理由は分らんけど。

「ふざけるな。なぜ、私がおんなのような事をしなくてはいけない」

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？気を遣うし。その辺あたしは平気だから」

「けっこうだ！別にイヤではない！その……い、一夏限定で、だがな」

え？最後何て言った？声が小さすぎて聞き取れなかつたんだけど。

てか、鈴が例のマイボストンバックを持ってきたという事は、始めからココに住むつもりで訪ねてきたのだろうか？だとすれば、なんでわざわざ俺の部屋に？部屋の設備は統一されているから、どこへ移っても大差はないはずなんだが………ふっ。さては鈴のヤツ同居人と一悶着やったな？

まったく、鈴は思った事をすぐ口にするから、人と衝突しやすいんだよな　　なんて事を思っていると、二人の雰囲気がどんどん険悪になっていった。

「ともかく、あたしはどうしてもココに住みたいの。だから譲ってよ」

「断る！私もこの部屋が気に入っているのだ。譲る気は毛頭ない！」  
熾烈を極める幼馴染の口論。このままだと押収がつかなくなりそうだし、何かこの場を収めるいい方法はないかだろうか………  
あ、いい方法を思いついたぞ。

「鈴、そんなにココに住みたいなら、俺が部屋を変ってやるうか？」

ギロ！ 箒が睨む音  
キツ！ 鈴が睨む音

なぜか、凄い眼光で睨まれた。それはもう、ライオンも逃げ出すんじゃないかってほどの。

あれ？俺が部屋を譲れば、箒は部屋を出なくて済むし、鈴もここに住む事ができて、万事解決だと思ったのに。一体、何が納得いかなかったのだろうか。まったく以って解せない。

そして、また始まる幼馴染の口論。

「そもそもだな。な、仲睦ましく暮らしている幼馴染の間に、いきなり割り入ってくるなど、無粋だと思わないのか」

「思わないわよ。あたしだって、一夏の幼馴染だもん。同居を主張する権利は当然あるわ」

「だが、付き合いは私の方が長い！なんせ小学生からの付き合いだからな。私の方が一夏の同居相手に相應しい」

「大事なのは時間じゃなくて、どうやって過ごしたかっていう密度よ。それなら断然あたしの方が同居相手に相應しいわ。だって、一夏と毎日バカやったもん」

「何を！ぐぐぐぐ」

「何よ！むむむむ」

まるで水掛け論だな。鈴は我が道を行く性格だし、箒も人一倍頑固だし。  
まったく話が進展しやしない。こうなると話し合いによる和解は望めそうも無いな。

なぜ人はこうも解り合えないのか。

こうなるとあれだな、なんとか粒子とか、なんとかベイターの力が必要になってくるな。

どっかのガンダム（自称）さん、何とか箒と鈴を解り合わせてくれんかね？量子破裂とやらで。

『何くだらん事を考えている！！』『何バカな事、考えているのよ！！』

二人が見事にハモる。お前ら、そう時だけ意見が合うのな！！

つか人の思考を読むな。お前らはイノベーターか。だったら分かり合え！！相互理解しろ！！

「ともかく、あたしも今日からココで暮らすからよろしく！」

「ふざけるな。ここは私の部屋だ。出て行け！」

箒は眉をぐうつと吊り上げ、激昂する。だが、鈴はそんな箒を齒牙にもかけず、俺の方を見た。

「ところで一夏さ。約束の事覚えてる？」

「ええい、無視するな。こうなったら実力行使だ！」

業を煮やした箒は、ベッド脇に置いてあったバックから竹刀を抜き取り、鈴へと踏み込んだ。

こら、馬鹿！竹刀っていつでもお前の実力で踏み込んだら洒落にならねえぞ！

くそっ！俺は急いで鈴を庇いに出るが、間に合いそうもない。

バシントツ！

無情にも竹刀が振り下ろされ、空気の破裂音にも似た豪快な音が部屋に反響する。

「り、鈴！大丈夫か！？」

「大丈夫に決まってるじゃない あたし代表候補生よ？」

見ると、確実にヒットしたと思われた打撃は、鈴の腕に展開されたISの一部によって受け止められていた。

俺と直接手を下した箒は、その光景に目を剥く。

ISの展開は人間の反射速度に依存する。なぜなら、展開の判断を下すのは、他ならぬ操縦者自身だからだ。つまり、箒の一撃をISの展開で受け止めたという事は、鈴の反射速度が箒の剣速を上回ったという事になる。箒の剣術は全国レベル、並の剣速じゃなかったというに、だ。

うえ、これが代表候補生の実力か。すげーな。……………って感心している場合じゃない。

「今の、生身の人間だったら本当に危ないよ？」

確かに良くて打ち身、最悪骨折の危険も孕んでいた。箒の実力を知っている俺だからこそ、これは言い切れる。

「ぐっ……」

被害者側に正論を浴びせられたら、加害者の箒は黙るしかない。

まあ、ここで開き直らないのが箒のいいところだ。ちゃんと罪の意識を持ち、省みる事をする。

その前に怒りで自制心を見失わなければもっといいのだが、生憎、人間はそこまでうまく出来ていない。

「ま、いいけどね」

鈴はカラッととした態度で、展開したISの腕を解除する。瞬く間に華奢な腕が現れた。

その後、気まずい雰囲気は部屋を支配した。

箒はさっきの失態を引きずって無言だし、鈴は鈴で水を得た魚のようにフンと得意げな顔をしている。いよいよ、面倒なことになってきたぞ。何かいい打開策は………そう言えば、さっき約束がどうとか言ってたな。

「なあ、鈴。さっき言ってた約束っていうのは」

「う、うん。覚えてるよね？」

鈴は急に恥ずかしそうに顔を伏せた。そして、時より期待の籠った瞳でチラチラと俺を見てくる。

俺はく約束>というワードをもとに、過去の記憶をサルベージした。イメージとしては、たくさんの小さい俺が図書館を走り回っている感じた。

約束、約束。そう言えば、昔……

「もしかして、あれか。料理の腕前が上がったら、毎日酢豚を

」

「そ、そうっ！それ！」

「おごってくれるってやつか？」

確か小学生の頃にそんな約束をした覚えがある。

我ながらよく覚えていたな。凄いぞ、俺。偉いぞ、脳細胞。サルベージしてくれたミニー夏たちにも感謝だ。

「……はい？」

「だから、鈴が料理をできるようにになったら、メシをタダでご馳走してくれるって話だろ？」

なにしろ、タダだ。ありがたい事この上ない。やっぱり持つべきものは幼馴染　パシンっ！

唐突に乾いた音が木霊した。

え？俺、ぶたれた？

何が起こったか解らず、面を食らう俺。

状況を把握するため、辺りに視線を馳せると  
ていた。

鈴が泣い

「……………バカ」

鈴は口を強く結び、瞳に目一杯涙を溜め込んでいた。俺を叩いたであろう右手は、血が滲みそうなくらい強く握られている。それでも気丈に振舞おうとしているのが痛々しい。

俺は頬の痛みも忘れ、狼狽した。それは箒も同じらしく、顔には出ていないが目をパチクリさせている。

「え、えつと……………」

俺は言葉を失う。かける言葉が見つからなかった。

「最つつ低い！！女の子との約束を覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツ。犬に噛まれて死ね！」

怒りの箆った瞳で、罵声を叩きつけてくる鈴。さすがに理由も解らず殴られ、罵倒されれば、俺もカツとなってしまう。でも、俺が何かを言うより早く、鈴は置いてあったポストンバックをひったくって部屋を飛び出していった。

開けられたドアがバタンと閉まる。

そこで俺は我に帰った。

でも、鈴が帰ってくる事はなか

「……何なんだよ、アイツ」

何が何だか解らない。俺が何をした。何を言った。約束だつてちゃんと思い出したじゃないか。褒められなくても、殴られる謂れはなかったはず。でも、なぜ、こんなに罪悪感が湧いてくるんだ。

「一夏、お前な……」

筈の呆れた声が聞こえてきたが、俺は聞こえないフリをした。俺は悪くない。でも、誰かの言葉を聞けば、俺が俺の正しさを信じられなくなりそうだった。

「悪い。今日はもう寝るわ……」

俺は適当に寝支度を済まし、ベッドに入る。そして現実から逃げるように頭から布団を被った。寝るにはずいぶん早い時間帯だったが、今日はさっさと寝て、全てを忘れしまいたかった。

(時間が解決してくれるだろ……)

瞼を閉じた俺の脳裏に、そんな楽観的な考えが過ぎる。

俺と鈴は幼馴染だ。今までくだらない喧嘩を幾度無くしてきた。その度、時間が解決してきてくれた。

きつと今度も時間が解決してくれるはず。早ければ明日、遅くても明後日には、いつもの通りの鈴が俺の前に帰ってくるはずだ。

だが、俺は後に知る。己の甘さと愚かさ。

### 第3話 特訓とぱんつと約束

T r a i n i n g   p a n t i e s   a n d

今回はラブコメっぽく書いてみたのですが、やっぱりラブコメは難しいですね。物語を悲しくするのは簡単なんですけど。

それはさておき、書いておいて何なのですが、鈴の『料理が上達したら毎日酢豚を食べてくれる?』という言葉がプロポーズという言葉に結び付けるのは、私的にちょっと無理があるんじゃないかなって思うのですよね。きつと、私も一夏と同じ誤解をしたいと思います。

アリス『大丈夫です。あなたに酢豚を作ってあげようなんて思う女性は今も現れませんから』

ですよね〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5613x/>

---

IS<インフィニット・ストラトス> Deus Ex Machina

2011年10月19日01時04分発行